

首都圏大学生の年金意識と年金満足

お茶の水女子大学 教授 永瀬伸子

昨年の10月にお茶の水女子大学の私のゼミ生が23大学の学生約1000名に大学生の年金意識に関する調査を行った。これは日本年金学会、公益財団法人年金シニアプラン総合研究機構から、第1回ユース年金学会を開こうと声かけがあったからである。ゼミ生から参加したいと張り切った返事があったので、ゼミをあげて調査を行うことになった。本稿では、こうしてゼミ生が行った大学生の年金意識について、調査の結果を紹介し、若者と年金について考えたい。

大学生が大学生に行った年金意識のアンケート

23大学は国立4校、早慶上智、GMARCH(受験雑誌では、学習院、明治、青山学院、立教、中央、法政大学をこのように呼ぶためこの呼称を用いさせていただく)、日東専他4校のグループである。

ゼミ生自慢になるが、ドイツでの夏の在外研究から帰ると3年生がしっかりとアンケートを完成させていた。その後、3年生が10月

の2週間に23大学を訪問、1大学30〜60部の配布を目標に主に大学のキャフェテリア等でアンケートを配り、学生自身がデータをエクセルに入力、着々と1000サンプルを目指して予定した大学をめぐった。学生による学会発表に向けて、クロス集計、平均値の差の検定、年金満足の規定要因の最小乗法分析までを行い、驚かされる手際の良さだった。

これまで大学の授業の中で調査票を配る形で大学生の年金調査がされたことはあるが、首都圏23大学を訪問し、各大学30〜60サンプルを目指して収集した調査は見たことがない。貴重な調査といえるのではないだろうか。

アンケートの結果は、非常に興味深いものだった。また私にとっても驚く内容だったといえる。

大学生の年金満足についての仮説

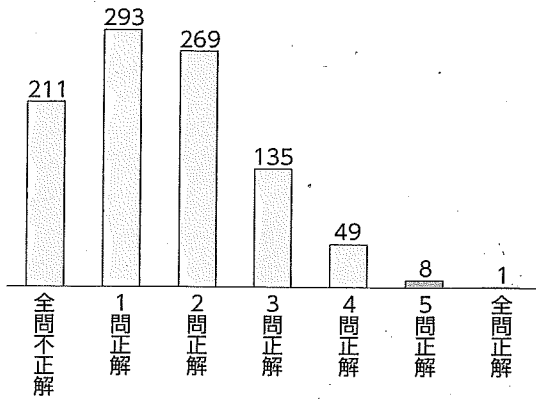
学生たちがアンケートを作る際には、次のような仮説を立てていた。①年金知識問題をアンケートに入れて、年金意識との関係を見

たい。年金知識が高いほど、年金意識も高く年金満足も高いのではないかと。②将来のライフプランと年金のあり方、例えば専業主婦願望があるかないか、親の介護への考え方と年金満足を見る。親の介護をしたくと考えているような大学生は年金意識も高いのではないかと。また生涯働きたいと思ってしまうような女性は第3号被保険者制度に不満を持ち、年金満足が低いのではないかと。③奨学金負担など、自分自身の借金がある大学生ほど、年金負担を重く感じて、年金満足が低いのではないかと。

大学生の驚くほど乏しい年金知識

知識問題として6問出題した。具体的には、1. 通常の基礎年金の受給開始年齢、2. 基礎年金のおおよその支給額、3. 公的年金にあてはまるものはどれか、4. 国民年金保険料のおおよその月額、5. 年金保険料を支払わなければならないと思う人の職業等の種類、6. 最低加入年数である。それぞれ5〜6程度の選択肢を提示した。

図表1 大学生の年金知識の正解数(名)



結果は図表1の通り、全問正解者は1名のみで全体の0・1%、しかし全問不正解した人は211名おり、全体の21・8%にものぼる。そして、全問不正解の人と2問正解までの人で全体の80%を占める。大学生の年金知識が極めて乏しいということがわかった。もともと正答率が高かったのは、基礎年金の受給年齢である。約6割が65歳と回答した。

しかし国民年金の月額のおおよその年金保険料については正答率が低い。1万円から3万円以上ま

で、5千円間隔で選択肢を提示したが、正解の1万5千円を選んだ者は24%に過ぎない。月に2万円以上と回答した学生が約4割もいた。20歳以上になると年金の支払い義務が生じる。そのため、20歳以上ではやや年金知識は高まる。そうはいっても正解率は低い。

基礎年金のおおよその支給額について、3万5千円から7万5千円以上まで、1万円間隔で尋ねたが、現在の満額の支給額である6万5千円を回答した者は16%に過ぎなかった。そして5割の者がより低い金額を回答した。具体的には3万5千円が13%、4万5千円が14%、5万5千円が23%、わからないが3割である。

このようにどちらかというところ、負担が重い方向に誤解をしている大学生が少なくなかった。

年金を払わなければならないと思う人について、「専業主婦(サラリーマンの妻)」に支払い義務あるという誤解は少なかった。そうした義務があると考える者は私立女子大学のグループが16%にとどまるが、これ以外では30%であり、女

子大学での知識の普及はより高いものであった。

なお学生は20歳になると社会保険料納付が義務付けられる。この際、猶予ができる学生納付特例制度を使っているとした成人学生は約半数いた。しかし使っているかどうか知らないという成人学生も2割いた。これは実家が手続きをしているかもしれないし、していないかもしれないが、自分はそれさえも知らないということの意味するのだろうか。

印象に残る年金の授業と年金知識

印象に残る年金の授業がある者の方が年金制度の正解数が高いかどうかを検定すると、印象に残る授業ありの正答平均が1・65、なしが1・52である。片側検定で10%水準とせよとだだが有意な差があった。学校の年金教育が拡充されることは系統的な理解を高める点で重要である。もともと年金の知識を仕入れる場所は第1にはテレビのニュースから、そして第2には親から、第3にはWEB

ニュースで、そして授業は第4位であった。また印象に残る年金の授業について、半数以上が「特になし」とすげない回答であった。回答者は大学1、2年生が半数以上を占めたためか、印象に残る授業としては高校の授業を挙げる者が多かった。また実際に人文系や理工系の大学では年金制度を考える授業は少ないのであろう。

年金制度への満足と年金知識との関係

年金制度について、「満足」「やや満足」「どちらともいえない」「どちらかという不満」「不満」のどれが考えに近いかを聞いたところ、51%が「不満、やや不満」と回答し、どちらともいえないとした者が38%、「満足、やや満足」は9%に過ぎなかった。「不満」から「どちらともいえない」と答えた人にその理由として聞いた六つの選択肢について、5段階評価で、回答を求めたところ、もともと回答が多かったのが「将来もらえるか不安」であり、90%の人がそう思うと回答した。このほかに「も

らえる額に世代間格差がある」年金の運営が不透明」の二つの変数に約70%の人がそれぞれそう思うと答えていた。

こうした不満は知識不足からくるのだろうか。当初、ゼミ生は、年金知識が増えるほど満足が高まる、という仮説を立てていた。ところが、平均値の差の検定を行った場合は逆の結果が出た。また多変量解析を行っても、同じように、知識問題の正答数が高い者ほど、年金満足が統計的に有意に下がるということがわかった。

これは、世代間の連帯として、極めて問題が大きい制度を我々が運営しているということの意味するのではないだろうか。つまり年金知識を身につけても、若者にとって納得性が増していないのだ。極めて根深い問題が提示されたと感じた。

ライフコース見通しと年金満足との関係

続いてライフコース見通しと年金満足の関係を聞いた。結婚をしたいと考える大学生は

8割、子どもを持ちたいと考える大学生は8割である。ところが予想外であったが、多変量解析を行うと、強く子どもを持ちたいと考える大学生ほど統計的に有意に年金満足が低いことがわかった。これは女性で顕著であった。いったいこれはなぜだろうか。理由はわからないが、子どもを持つには、お金がかかるから、年金保険料負担を重く感じるのかもしれない。またこれは私自身が子育て期に感じていたことであるが、日本の女性の多くは無職になって子育てをしてきた。こうして子どもへの時間拠出をする者ほど、これまでの年金制度は(無職になっていたことか

ら将来年金が低くなってしまいう仕組みであった。こうした制度への不満もあるのかもしれない。一方、世代間扶養を支持すると回答した女性では、有意に年金満足が高く、これは仮説に合致していた。男性では有意な結果は出なかった。

専業主婦になりたいかどうか、また配偶者が専業主婦になってほしいかどうか、「どちらともいえない」の選択肢も入れた質問も加えた。専業主婦になりたいと「全く思わない」、「まあ思わない」の合計は女子学生は全体で過半数、国立大学でもっとも高く71%、私立女子大学で次いで高く60%であった。また配偶者について、「全く」、「まあ」なってほしくない男子学生は大学の差は少なくほぼ4割を占めたが、GMARCHでもっとも低く36%であった(図表2)。

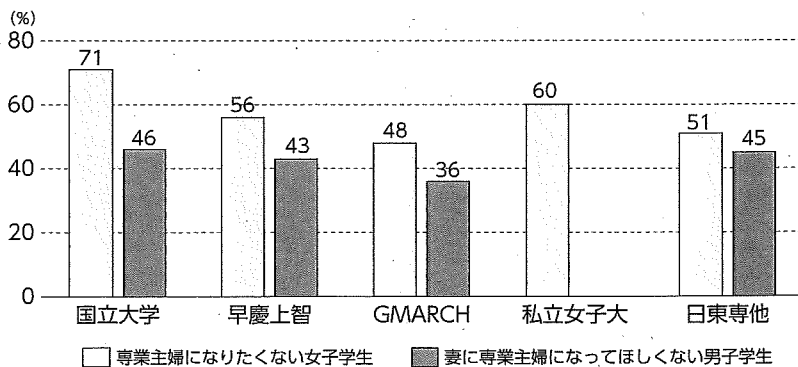
逆に専業主婦になりたい(「とてもそう思う、まあそう思う」)の合計は女性で26%、男性については、配偶者になってほしいかどうかを聞くと、肯定の合計が19%だった。専業主婦肯定の方が、年金満足が高いのではないかと考えて検討したところ、国立大学、早慶上智、GMARCHの学生に限定した場合に、予想通り、専業主婦肯定グループの男性、女性とも年金満足度が有意に高く、専業主婦否定グループの女性では、年金満足度が有意に低い結果が見られた。女性と年金について、専業主婦に有利な側面があると大学生が認識している可能性が高い。

「まあ」なってほしくない男子学生は大学の差は少なくほぼ4割を占めたが、GMARCHでもっとも低く36%であった(図表2)。

逆に専業主婦になりたい(「とてもそう思う、まあそう思う」)の合計は女性で26%、男性については、配偶者になってほしいかどうかを聞くと、肯定の合計が19%だった。専業主婦肯定の方が、年金満足が高いのではないかと考えて検討したところ、国立大学、早慶上智、GMARCHの学生に限定した場合に、予想通り、専業主婦肯定グループの男性、女性とも年金満足度が有意に高く、専業主婦否定グループの女性では、年金満足度が有意に低い結果が見られた。女性と年金について、専業主婦に有利な側面があると大学生が認識している可能性が高い。

専業主婦になりたい(「とてもそう思う、まあそう思う」)の合計は女性で26%、男性については、配偶者になってほしいかどうかを聞くと、肯定の合計が19%だった。専業主婦肯定の方が、年金満足が高いのではないかと考えて検討したところ、国立大学、早慶上智、GMARCHの学生に限定した場合に、予想通り、専業主婦肯定グループの男性、女性とも年金満足度が有意に高く、専業主婦否定グループの女性では、年金満足度が有意に低い結果が見られた。女性と年金について、専業主婦に有利な側面があると大学生が認識している可能性が高い。

図表2 大学グループ別、専業主婦になりたく(になってほしく)ない学生の割合



昨今の奨学金事情と年金満足

続いて大学生の奨学金負担と年金満足との関係を見る。

本題に入る前に大学生の奨学金事情について少しお話しする。読者の多くは日本育英会による奨学金になじみがある方が多いのでは

ないだろうか。1990年代には、日本育英会から奨学金を得られる大学生は少数であり、無利子の奨学金を受ける者がほとんどであった。2004年に日本育英会は他の機関とともに独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）として統合される。その後、有利子奨学金である第2種奨学金の給付が大きく増加、2004年には約52万人であったJASSOの奨学金貸与者数は、2013年には144万人に増加した。JASSOが実施している平成26年学生生活調査によれば、大学生で奨学金を受給している者は、平成26年で大学生の52%である。またJASSOの奨学金を受けている大学生はJASSOのホームページによれば平成26年で無利子奨学金（第1種奨学金）が大学生の11%、有利子奨学金（第2種奨学金）と合わせると大学生の38%を占めるようになった。返済は原則卒業後20年以内である。

の半数近くが奨学金負担を抱えて卒業していく。しかし大学卒業直後の正社員比率はだいたい7割程度に過ぎない。そうした中で奨学金返済がはじまり、さらに年金保険料納付が義務付けられる。また学生納付特例制度を使う学生は、我々の調査では成人学生の約半数である。この制度は、基礎年金保険料の納付を在学中は猶予してくれて、あとから追納することを求める制度であるため、これも一種の借金と意識されている可能性がある。予想通り、奨学金を持っているかどうかと年金満足との関係を見ると、平均値の差の検定でも多変量解析でも、いずれにしても奨学金負担がある者の年金満足は統計的に有意に低いものだった。我々の調査では、3割の大学生が奨学金を受給していた。

若者が納得する年金制度とは

年金制度は、学生にもメリットがないわけではない。障がい者となった場合に障がい年金の給付を得られる。しかし大学生が障がい者になることはごく稀である。そのためほとんどの者にとって「先のことでピント来ない」と感じられている制度である。しかも卒業すれば、収入がなくなると原則として社会保険料納付を義務付けられる制度となっている。国が運営しているので安心とする者もいるとはいえ、若者の雇用が不安定化し、収入増も大きく見通せなくなっている中で、こうした特徴は大学生が不満を感じる素地となっているのではないかと。年齢による区分だけによつて、若者であれば経済が不安定であるとしても高齢者に仕送りをすべきかどうかは問われるべきなのではないか。若い時代は親の庇護もあり豊かな時間を過ごしやすい時であるが、独立に向けて脆弱性が高まる時期でもある。現在、大学生の半数は奨学金を借りており、卒業後はこれを返していかないとならない。またかつてほとんどの学生が正社員の職に就けたのに対して、就職がうまくすすまない若者も少数ではなくなっている。そして

て非正規雇用で仕事をはじめた場合、年収も低く、雇用安定も望みにくい。若い時期は出産育児にとつて重要な時期でもある。しかしそれには費用がかかり、多くの育児時間が必要となる。もちろん若いということ、高齢者が持たないすばらしい資産も持つ。身体が若く、未来という時間がある。しかし例えば年金制度から若者の子育て期に、あるいは教育訓練を受ける時期に何等かの給付があるような制度であれば、より高齢者との連帯を感じられやすいのではないかと。何よりも、大学生の意見の聞き取り、発言の機会を与えるべきである。そして若者の育成という視点を持つべきである。また大学生の年金知識のなさについては（恐らく税金知識も同様であろう）、日本の市民教育について考え直すべきである。

この調査については、11月にはお茶の水女子大学『生活社会科学研究』に「大学生の年金知識と年金意識」として掲載される予定である。HPからも読めるので、ぜひ検索しご覧いただきたい。